

むかし・あけぼの上

小説枕草子

田辺聖子



角川文庫

むかし・あけぼの

上

たなべせいこ
田辺聖子



角川文庫 6448

昭和六十一年六月二十五日 初版発行
平成四年八月二十日 二十四版発行
発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話 編集部(〇三)三八一七—八四五—

営業部(〇三)三八一七—八五二—

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——大日本印刷 製本所——本間製本

装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社通信販売課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

むかし・あけぼの

上

—小説枕草子—

田辺聖子



角川文庫 6448

1

まったく、則光^{のりみつ}ったら、なんでこうも私をイライラさせるのかしら。

イライラさせる、っていうのか舌打ちしたくなるっていうのか。

憎らしいっていうのか、じれったいっていうのか。

昔とちつとも違ってやしない。

いや、ある点では昔より冴^さえなくなっている。たとえば、太っちゃったこと。

昔——もう十年ちかく前だから、むりもないけど——ハタチぐらいの則光は、まだ瘦^やせていた。ほっそりして長身で、うしろから見ると姿のいい男で、どんな貴公子かと思ったものだ。(前から見るとどこことなく間のびした顔なのだ、これが——)

せめてそれが取り柄^{とぐら}であった。

しかし今は、体が重そうに四肢^{しし}も肉がつき、太っている。則光の心に反して体はむくむく太り、それもただ肥満しているだけでなく、はちきれんばかりの活力を押しかくし、力がありあまってむずむずしている、そんな感じである。

「体」は野卑^{やひ}というべくすこやかなのを「心」に対してすこし羞^はずかしく思っている、そ

んな感じで、私には捉えられる。

殿上人や、やんごとない公達には、三十前後の若さで太っている人もないではないが、それでも、そういう人のは、

「清らかな肥満」

とでもいうべく、けだるい、眠たげな、上品さがある。色が白く、高貴な面立ちをしていらつしやるから、何もかもふつくとみえる。

挙措進退も、したがつて軽々しくなく、みやびやかにおちつき、そうになると、太っているのままで美点になる。瘦せた人は、衣服に風が通って軽躁にみえるが、太った人は、中身が充実してみえ、別の魅力が生れてくる、というものだ。

しかし則光は何としよう、ただもうやたら頑健な体つきになってしまつて、殺しても死なないという憎々しいような凶体、持主の則光にもことわりなく、こうなつてしまつた、というところであらう。

肩の肉なんか盛り上つて、腕の力こぶなんか、荒行の修験者でもかなわないくらい、深山の百年杉のように太くてがっしりした首、一枚岩のようにぶあつく頑丈な胸板。(その中には、体つきに似合わぬ、気のよわい、単純な心がおさめられている。)

そうして首の上にのせた肉厚の童顔は、いま、どこことなく紐のほどけた、一種言いがたい、心もとない表情を浮べているのだ。女房たちが気やすく、

「則光」

「則光さん」

と親しむはずである。尤も則光は、女たちばかりでなく、宮廷の男たちにも評判はわるくなく、氣受けはいい方である。「氣よし」と思われている。

「氣よし」と思われるのは、いちめん、バカにされていることであるけど。

若いころの私は、そういう則光が氣に入らないのであった。氣に入らなくても、父が則光を私の婿にきめたので仕方がない。

あのころは則光とケンカばかりしていた。

則光に新しい女ができて、そっちの方に子供が産まれたからである。まあ、男は二人妻どころか、三人四人、やんごとないあたりの方々は十なん人も妻をお持ちになる世間の風習だから、下っぱ役人の則光だって、二人ぐらい持つてわるいということはないけれど、私は、がまんならなかったのだ。

私はすべて、

「唯一人の人」

にならなければいやだ。

「一番」

でなければ、二番や三番なら、死んだ方がましである。どこまでも「一の人」をめざす。トシこそ、私より一つ二つ上だけれど、才智もなく、すこしヒビキの鈍い則光ごときが、私のほかに女を一人持つなんて、私の自尊心は堪えられないのであった。結婚してつくづく、

則光に失望したのだけれど、彼は、平均男性の水準ほどの文学的教養すら、ないのだ。

役人に必要な漢字だけは、曲りなりにどうやらこうやら修めてはいるが、物語や歌にしたいしむ、あるいはまた、人の世の優美な情趣を解する、女心や男心の機微、恋の諸わけを知り、もののあわれに心打たれる——といった風流げは一切なしの、全くの朴念仁だったのである。
(これじゃ、話もできやしないわ……)

と、私は、結婚して数日後には、がっかりしていたのだ。

則光は、私がそう思っているとは知るよしもなく、若妻の私に夢中になっていた。家にいると片ときもそばを離れず、それかといって面白い話題を提供したり、考えついたりする気働きもないので、赤ん坊が乳をほしがるように、私の体ばかり貪っていた。

「あの人、ちっとも面白くないので、こまるわ、お父さま。どうやって教育したら、いいんでしょう」

私は父にいった。

父はもう、七十六歳であった。私は父の、五十八のときの子である。おそくにできた末娘なので、父は私を溺愛していた。

父は清原元輔きよはらのもとすけといい、官界より、歌壇に名がたかい。「後撰集」の撰者にもえらばれたということだけれど、その輝かしい閱歴は、すでに私の生れる前に終ったことである。いまでも折々は、権門けんもんの家にお喜びごとがあると、求められて儀礼的な祝い歌をつくって奉つたりする。

そういう父の栄誉は、私自身の誇りでもあったが、しかし内証ないしよでいうと、家庭内の父は禿はげあたまの、面白い冗談をいう爺さんである。

父はいつか賀茂祭かもまつりの使者となって威儀いぎを正し、馬で一条大路いちじょうおおじをゆく途中、馬が何かにおどろいてつまずいたため、路上に転倒した。

それはよいが、おかげで冠が落ち、つるつると禿げたあたまが露出した。

何しろ、冠や烏帽子えぼしをとるのは、下着をとって裸になるのと同じくらい恥ずかしい、みつともないこととされているのだから、見物人たちはどっと笑った。それも髪があればともかく、つるつ禿げのあたまに折からの夕日が赤々とさして、後光のように光り輝いたのだから、どんなに異様な見ものであったろうか。殿上人てんじやうひとの車がたくさん並ぶ前だったから、馬の口取りたちはあわてて冠をさし出した。

ところが父はそれを制して、

「あわてるな、ご見物の公達きんたちに申上げることがある」

と殿上人の車のそばへ歩み寄り、

「馬から落ちて冠をおとした私を、公達はさぞおかしく思われましような。しかし、それはあやまりと申すもの、用心深い人でも物につまづくことがある。まして馬ならよけいでありましよう。この大路は石ころも多い道じゃ。馬の罪ではない。まして、私に落度あったのでもない。それに冠は結ゆわえるものではない。髪の上にのせて冠を安定させるもの、しかるに私にはすでに鬢びんは失われておる。されば落ちた冠を恨むべき筋合いのものではござらん。こ

ういう例は多々あるのです。なにがしの大臣は^{おとど だいじょうえ}大嘗会の御禊^{ごけい}の日に落された。またなにがしの中納言^{ちゅうなごん}はさる年の野の行幸^{みゆき}に落された。なにがし中將^{ちゅうしょう}は祭の帰さの日、紫野^{むらさきの}で落された。かくのごとき例はあげて数えることもできませんぞ。さればそのあたりの故事、物の道理もわきまえなさらぬ若公^{わかきん}達^{たち}らが、やたらお笑いになるものではないのじゃ。笑うものこそ、痴^しれ者と申してもよろしかろう。おわかりかな？」

と車に向つて身ぶり手ぶりで説教し、おちつき払つて大路に突つ立つと、高らかに叫んだ。
「冠をもつてまいれ」

そうして、馬の口取りが捧げた冠をおもむろにかぶつたので、見守っていた人は堪えきれず、声合せてどっと笑つたのだった。馬の口取りは、

「なんですすぐ冠をお召しにならないので？ やくたいもない演説をなさつたんでございます？」

と聞くと、父は、

「ばか者め、こうやって道理を言い聞かせたればこそ、この場では笑うが、あとあとまでは笑わんのだ。そうでなかったら、あの口さがない、ばかの青二才^{あおにさい}どもめ、いついつまでも私をなぶり者にして笑うたであらうよ」

といったそうである。

父は人を笑わせることがうまく、それに肝太^{きん}い、人を人と思わぬところがあつたようである。それも悪辣^{あくらつ}、したたか、といった意味ではない。恵まれた歌才を自分でももちあつかい

かねるほどでありながら、公人としてはあまりに微小な身分なのであった。官位は遅々としてすすまず、年月は待ってくれなかった。父はそのうちに、この人生や人間に対してある種の達観や、開き直りを持ったらしい。

それが父を、「世に馴れたる人」にしたらしい。父は官位こそ微禄卑小の身だが、手だれの歌よみで、洒脱で諧謔を弄する人、と世間に思われるようになった。

父のはじめの子供——私にとっては長兄——は、すでに私より二十以上年上なのであった。姉もはや、人に嫁して中年になっている。私と、すぐ上の兄の致信を生んだ母は、父にとっていちばん新しい妻なのであったが、早くに亡くなっていて、私は母の顔を知らなかった。そのせいでか、父は末っ子の私をよけい可愛がってくれたようだ。

「かわいい姫や」

というのが父のおどけたときの口ぐせで、

「もし、お父さまがどこかの上国の太守になったら、お前もうんと飾り立ててかしくさせて、すばらしい婿君を取ってあげるよ」

というのであった。

「それじゃはやく、そうしてよ。お父さま、どうすれば守になれるの？」

と私はせがんだ。

「それは、えらい方々、主上や月卿雲客のお定めなさることだ」

「ではおねがいにあがれば？ 娘が喜びますから、ぜひ、はやく守にして下さいませ、と、

おっしやれば？」

「わはははは。娘だけではない、わしだって、守になれば大喜びだがね。大喜びするのは誰だつて同じ、だからたくさんの人がそれを望んでいるから競争がはげしいのだ。希望者は多いのに国の数は限られている、娘一人に婿八人とは、このことなのだよ」

私が物心つくころには、春の除目のたびに大騒動になっていた。春の除目は地方官の任命である。毎年のように、

「今年こそは、うちの殿様も運が向いてとられるかもしれない」といので、古い郎党たちが田舎あたりからも上洛してくる。

「どないです？ 今年もかなり運動費をつぎこんだんでっしやろ。順序からいうても、もうそろそろというところとちやいますか」

などと、親類たちも集まってくる。これはうまくいけば尻にくつついてもろともに旨い汁を吸おうという、欲の皮の突っ張った連中である。それらの訪問客の牛車が立てこんで轅のひまもなく、ぎっしりとなる。任官祈願の物詣でをするというと、われもわれもとついでくる。

人々は集まって、

「前景氣、前祝いや」

と果てしなく物を食ひ、酒を飲み、

「ぐーっとあけなはれ、親方日の丸や、うしろに殿さんがついてはる、きつと上国、上

上国の守にならば、えらい日の出の勢いや！」

などと大気焰をあげて歌なんか唄っている。

それが三日つづく。除日は三日にわたって行なわれるのである。

三日目の晩までに任命の知らせがないと、みんなきよときよとする。

任官の詮議を終られた上達部たちが、次々と先払いをさせて帰ってゆかれる。前駆追う声を門前に聞くようになって、まだ、吉報の使者は、門を叩かない。

はや、夜は白々とあけてくる。

そのうちに、連絡係りとして見にやらせておいた下男が、詮議の果てた役所から、とぼとぼと帰ってくる。寒さと空腹と失望にやつれたその顔を見ると、邸の人々は、

「どうだった？」

と聞く気さえ、おこらない。

よそからやってきた郎党や、親類のあつかましい取巻きたちは無神経に、

「どやどや、殿さんは何国の守や？」

というのである。

こういうときの答えは、だれもきまっていて、「あきまへん」とはいわない。「何々の国の前司ですよ」という。前の国司、というので、結局、新任の国司にはなれなかったことである。

田舎から上ってきた郎党や古い馴染みの家来はがっかりして、一人去り、二人帰りしてい

つのまにか出ていく。取巻きや親類はこそそといなくなったりする。

どこへもいきようのない家来たちは、早や、来年^{けつかん}闕官予定の国々を指折って数えたりして嘆息している。

その中で、常識的にいえば、いちばん落胆し、嘆いているのは邸^{やしき}のあるじであるはずなのに、父ときたら、

「かわいい姫や」

と、少女の私にふざけて、こつそりいうのである。

「これでまた、来年までの楽しみができたわけだよ」

「どうして」

「また一年、やきもきしてあれこれ運動したり、金策に走りまわったり、あちこちにお追^{おひ}従^{しゅう}したり。男の仕事ができたわけだ。目標があると張り合いができるというものだよ」

「でも目標ばかりで、いつまでも実現しなかったらこまるわ。そういう楽しみは、もう、ほどほどのところでいいんじゃない？ お父さま」

「あははは。お前のいうとおりだ。いつまでも来年の楽しみばかりでは、わしも年とつてしまう。お前のために、いつまでも元気にいるつもりだけれどね」

それは本場で、父は老人だけれども体は頑健^{がんけん}で、精神も活潑^{かつぱく}だった。私の生れたときから老人だったから、私にとって父は、老いたようにはみえなかった。

父は司召^{つかさどし}にはずれると、歌をつくって、しかるべき人々に贈った。それらのあるものは秀

歌として宣伝され、賞讃しょうさんを博し、人々の共感を誘発して、世間にひろまっていた。

年ごとにたえぬ涙やつもりつつ

いとどふかくや身をしづむらむ

ところみに折もしあらば伝へなむ

咲かで露けき桜ありきと

禿頭とくとうをいただいて、いつまでも不遇に沈淪ちんりんしているのを嘆く歌であるが、父は私に向って、「なあに、来年こそは。——がっかりし慣れると、人間、しぶとくなるもんだよ」と片目をつぶって笑っていたのだ。

それは娘を元気づけようとするために、わざとしているのではなくて、父は生得しょうとく、そんなところが性質の中にあつたように思われる。

どんなときにも父は、しんからしよげたり、失望したり、気鬱きうつになつたりしたことはなかつた。悲しい歌をつくつても、父にいわせれば、

「悲しいという気持をみつめている、もう一人の自分がいないと、悲しい歌なんか、詠よめないものだ」

といっていた。

「歌というものは、追憶と客観の中から生れる。その最中に詠よんでるようでも、必ずもう

一人の自分が、自分を眺めているところがある」

ともいった。

私はまだ、父の言葉がよくわかったとはいえなかった。それに父は、私に歌の手ほどきはしてくれたけれど、どうやら、私に歌の才がないのに気付いたようだった。

「無理をすることはない」

と、父は慰めた。

「歌なんか、詠めなくともよい。お前はあたまのいい子だ。お前の中には、何かしら、面白い、かわいらしいものがある。魅力がある。そういうものは、見る人がみればわかる。いまにお父さまだけでない、ほかの人々も、『かわいい姫や』と心からいつてくれるようになるだろうよ」

「お嬢さんが？」

「そうだな。夫にかわいがられるか、それとも……宮仕えにでも出るようになれば、もつとたくさんの人に好かれるかもしれない」

父はわりにひらけた考えの持主であった。

昔風に、「女は家庭を守り、いい夫と子供に恵まれ、生涯、世の波風を知らないのが幸福」とは、私に教えなかった。また、「女は夫や子以外に顔を見せるものではない。鬼と女はかくれている方がよいのだ」とも強いなかった。

宮仕えする女たちもたくさん見なれ、かつ、私の亡き母は、小野宮家の女房だったという

ことだ。才気があつて社交家で、ご主人にも来訪者にも頼られ、人気者だったということだ。「そういう女は、世の中の花みたいなものだ。女ながらに世の中へたちまじつて、人をたのしませたり、自分もたのしんだりする、そういう人生であつてもわるくはない。——しかしまあ、一人の男に愛される人生も、わるくはない。お父さまとしては、お前に、無難な幸福を用意してやりたいからね」

父は私に、いろんな人生を思い描いているようであつた。

もう一人前になった私の異母兄妹たちは、すでにそれぞれの道を歩んでいたが、官吏として前途有望、というような人はいなかった。

一人は雅楽頭で、音楽関係の人になったし、またもう一人の兄は僧侶であつた。私のすぐ上の、母が同じの兄、致信は、よくいわれる「京わらんべ」で、不良のあばれ者であつた。父は兄の致信にも心をいためているようであつたが、

「ま、しかたないさ。その子それぞれの、持つてうまれたものだ。あれも追い追いに恰好つくだろう」

といつていた。しかし私は、兄とは仲よしだった。

ついに、父が六十六歳のとき、待望の、上国の国守になれた。周防守に任じられたのだ。

「おめでとうございます」

「いや、この日をお待ちしましたぞ」

日が当る家には人はどっと集まってくる。